

共観福音書における神の国

村 瀬 俊 夫

1

マルコの福音書は、イエスの公的宣教の物語を次のような意味深いことばで書き出している。「イエスはガリラヤに行き、神の福音を宣べて言われた。『時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい。』」(マルコ14:15)。こうして福音書記者マルコは、イエスの宣教の中心は神の国を告知することであった、という事実を明らかにしている。そのことは、共観福音書に記されているイエスの教えを読むとき、はっきり証明される。イエスが宣べ伝え、また教えられたメッセージの中心的内容は、神の国であった。イエスが語られたたとは、その多くが「神の国は……のようなものです」ということばで始まる。神の国はどのようなものであるか。それは種を蒔く人が種蒔きに出て行くようなもの、からし種のようなもの、すばらしい値うちの真珠のようなものである。人はどのようにして神の国に入るのか。ある人は自分の財産を全部売り払い、それを貧しい人々に施す。ある人は幼子のようになる。それほどまでして神の国にはいらなければならないのか。イエスは、「もし、あなたの手があなたのつまずきとなるなら、それを切り捨てなさい。不具の身でいのち(=神の国)にはいるほうが、両手そろっていてゲヘナの消えぬ火の中に

落ち込むよりは、あなたにとってよいことです」(マルコ9:43)と言われる。そのようにイエスの御思いの中で、まさに神の国は至高の価値を持つ概念であった。それゆえ、その神の国についての理解が足りないと、イエスが宣べ伝えられた福音の意味をほとんど把握できないことになる。^②

「神の国」という概念は、旧約聖書に深く根をおろしている。イエスが神の国を宣べ伝えるとき、それについて特に説明を加えられることがなく、また聴衆も「神の国とは何か」と質問することをしなかったのは、そのためである。出エジプトのとき、主なる神はイスラエルの民を紅海を渡らせることにより、エジプトの軍勢に対して「輝かしくも勝利を収められ」た。そのときの勝利を歌った「紅海の歌」(出エジプト一五—一八)に、「主よ。神々のうち、だれかあなたのような方があるでしょうか。だれがあなたのように、聖であって力強く、たたえられつつ恐れられ、奇しいわざを行なうことができましようか。……あなたが贖われたこの民を、あなたは恵みをもって導き、御力をもって、聖なる御住まいに伴われた。……主はとこしえまでも統べ治められる」(11:13 節)とある。この歌の現在の形は後世のものであるとしても、主がその民を導き、王として支配される方である、という考えが出エジプト時代からあったことが推定される。たとい「王」という称号が用いられなくとも、王である神という思想の原初的な形がここに見られる。^③

イスラエルは主なる神の王としての支配を、その神の歴史的なみわざの中に見た。それは「領土」でも「支配領域」でもなく、イスラエルの民を導かれる王の王としての支配統治である。それゆえ、旧約聖書の中で明確にされてきた「神の国」は、主なる神がその民を導かれる王としての支配・主権・統治のことである。その神の王としての支配が全地に及ぶことが、預言者のことばや、くわゆる「即位の詩篇」に述べられている。イザヤは神殿の礼拝で、「高く上げられた王座に座しておられる主」を見た。セラフイムは「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。その栄光は全

地に満つ」と叫んだ。そのときイザヤは、「万軍の主である王を、この目で見た」と言った(イザヤ六一—五)。エレミヤも主なる神について、「諸国の民の王よ。だれかあなたを恐れぬ者がありませんか。それは、あなたに対して当然なことですか」(エレミヤ一〇七)と言う。そしてイスラエルに告げられる良い知らせは「あなたの神が王となる」ことであり、「地の果て果てもみな、私たちの神の救いを見る」ことである(イザヤ五二—七—一〇)。即位の詩篇には、「主は王である」という唱句が出てくる(九三—一、九六—一〇、九七—一、九九—一)。そして主なる神の即位が力強く歌われる。「神は喜びの叫びの中を、主は角笛の中を、上って行かれた。……まことに神は全地の王、巧みな歌でほめ歌を歌え。神は国々を統べ治めておられる。神はその聖なる王座に着いておられる」(四七—五—八)。「ラッパと角笛の音に合わせ、主である王の御前で喜び叫べ。……確かに、主は地をさばくために来られる」(九八—六—九)。これらのことばから、イスラエルの神の王としての支配が終末的な救いの期待と結びついている、ということがわかる。

したがって、「時が満ち、神の国は近くなった」というイエスの宣教は、イスラエルの歴史の中で啓示され、終末論的な救いとして待望されていた神の国が、ご自身の来臨と宣教によって実現される時が来た、ということを告げている。このようにイエスの神の国の宣教は、イスラエルの偉大な預言者的・終末論的伝統において把握されるとき、初めて正しく理解されるのである。

2

ところで、共観福音書以外の新約聖書の諸文書では、神の国の思想がかなり後退しているように思われる。しかし、それは表面的にそう見えるだけであって、たとえばパウロの宣教は、これを救済史的に見るとき、イエスの神の国の宣教を正しく継承し、展開していることがわかる。そのことはヨハネ文書についても当てはまる。特に新約聖書

の結びであるヨハネの黙示録は、神の国とこの世の国との激しい対立を生き生きと劇的に描写している。それで新約聖書全体は、啓示された神の国の書であると言つてよい。

しかし、教会および神学の歴史において、神の国の思想がいつも中心的位置を占めてきたと言つことはできない。教父アウグスティヌスは、ローマ帝国の衰亡を前にして著した大作『神の国』(De Civitate Dei, 413—26)の中で、神の国と地上の国との激しい対立を前面に押し出した。ところが、このアウグスティヌスの著作から、神の国はカトリック教会である、という中世のカトリック教会の教義が生まれた。こうしてカトリシズムにおいては、神の国を地上の見える教会と同一視し、ついには教会が神の国に取って代わるようになった。この誤謬を正すためにも、宗教改革の必要があった。それゆえ、宗教改革者ジャン・カルヴァンの神学において、この点で大きな変化が見られたのは当然である。カルヴァンは神の主権性を強調し、それが彼の神学の基調となった。その神中心的性格のゆえに、カルヴァンの神学において神の国は重要な位置を占めていた。しかしながら、その神中心的観点はスタティック(静的)な方法においてであったため、聖書に啓示されている神の国の歴史的・終末論的局面が見落されていた。

神の国をめぐる神学的論争が活潑に展開されるようになったのは、十九世紀以後である。自由主義神学の人々は、彼らのキリスト教信仰の理解を立証するために、イエスの神の国の宣教に訴えた。彼らが主張したことは、「パウロからイエスに帰れ」、すなわち「複雑な教会の教理から単純なイエスの福音に帰れ」という呼びかけであった。彼らにとって、神の国とは、イエスによって地上に創立され、人間の力で拡大していく愛と平和の世界であった。この点で、アメリカとヨーロッパにおける強調点の相違があった。前者では神の国の社会的側面が強く打ち出され、後者では神の国の個人的・人格的意義が強調された。そのように新しい社会秩序あるいは宗教的人格性のいづれに強調点が置かれても、その神の国は、著しく人間中心的な啓蒙主義の影響を受け、ダーウィンの進化論に誘発された楽天的人

生観に色どられた理念であった。この自由主義神学は、ヨーロッパにおいて、第一次世界大戦まで優位を保っていた。しかし、第一次世界大戦の悲惨を経験したヨーロッパの人々は、楽天的人生観の夢をさませられた。その時期から、ヨーロッパの神学において、神の国の終末論的考察が大きな影響力をもって登場してきた。

それ以前から、史的イエスの探究をめぐる新約聖書の釈義的研究において、自由主義的なイエス像や神の国の理念が歴史的にも聖書的にも支持されることが知られていた。ヨハネ・ヴァイス^④（一八六三—一九一四年）とアルバート・シュヴァイツァー^⑤は、神の国が啓蒙主義とは全く異なる雰囲気、ユダヤ教的終末観を背景にしていることを指摘した。ヴァイスは、イエスの説教によるなら、神の国は人間によってではなく、ただ神によって確立されるものである、ということを見出した。シュヴァイツァーは、それが後期ユダヤ教の黙示文学の世界に由来する点を強調し、いわゆる徹底的終末論の観点から、福音書とイエスの歴史の全体を説明しようとした。イエスは終末がすぐにも来ることを期待していた。イエスは道徳的教師ではなく、黙示文学的終末論者であった。イエスの戒めは、どの時代にも通用する普遍妥当なものではなく、目前に迫った終末を前提にし、それに備えての中間倫理である。しかしシュヴァイツァーによると、イエスの期待はついに実現されず、十字架で非業の死を遂げたのである。

このようなシュヴァイツァーのイエス伝に対する考えは、あまりに空想的であり、極端な修正を福音書の歴史に要求するものであったから、そのまま支持する人はいない。しかし彼が提出した神の国の終末論的解釈は、自由主義神学の失敗を明らかにする決定打となった^⑥。こうして神の国は人間の力を越えた超越的実在であることが認識されたとき、福音書は新しい眼で読まれるようになった。ところが、共観福音書における神の国の終末論的性格が認められたとき、終末論とは何か、ということでも新たな神学的論争が展開されるようになった。この論争の焦点となる人物は、ルドルフ・ブルトマンである。彼は自由主義の神の国に反対し、それを徹底的に批判する。神の国において何よりも

重要なことは、人間の力で神の国を実現させることではなく、神のみわぎの歴史である。ところが、ブルトマンにとって、この神のみわぎをいかに理解するか、ということが問題となる。それは自然界に対して加えられる天からの衝撃という意味での奇蹟ではない。現代人はそのような意味での奇蹟を信じることができない。こうして彼は、新約聖書の神話的表象の中で現在の私たちにも真実に語りかける永続的真理を発見すべきであるとして、新約聖書の非神話を提唱する^⑦。そのように非神話化された真理は実存的性格のものである。神はイエス・キリストの福音において、いつも私たちを実存的決断の前に立たせてくださる。神はキリストの十字架において、人間の手のとどかない地点にある選択の可能性を実存的に選び取ることに、人は救われて真に自由になる。すなわち、彼は人間としての実存を得て、真の人間になる。ブルトマンによると、イエス・キリストの来臨によって開始された神の国は、継続的な啓示という意味での救済史ではない。そこにあるのは、ただ実存的な意味における、すなわち、福音における神の真実な語りかけに応答する個人的・人格的決断の連続としての救済史である。こうしてブルトマンは、古い型の自由主義を全く新しい型のものに変えてしまった^⑧。

3

共観福音書における神の国は、マタイの福音書によると、イエスの宣教に先行してバプテスマのヨハネによって宣教された。ヨハネもイエスも共に、「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」と宣べた（マタイ三二、四一七）。マタイの福音書が「神の国」と同義的に用いている「天の御国」は、後期ユダヤ教の用語（マルク一〇・シヤマイム）で、預言者たちによって約束され、民族主義的ないし黙示文学的に、いろいろな形でイスラエルが待望していた、神の救いが実現する新しい世界を指していた。ところで、ヨハネとイエスの宣教は、単に天の御国について語ったので

はなく、「天の御国が近づいた」と宣言している点で、全く新しい性格のものであった。それは、まさに、終末の到来を告げるラツパの響きであった。

それと同時に、イエスの出現と宣教が、そのような神の国の終末論的性格に込められているように思われる面があったことにも、注目しておかなければならない。このことは、共観福音書における神の国の性格を明らかにする上で、特に重要な意味を持っている。ヨハネはイエスに、「おいでになるはずの方は、あなたですか。それとも、私たちは別の方を待つべきでしょうか」(マタイ一三)と問うた。なぜなら、イエスはヨハネが期待したように「手に箕をもって」(マタイ三12)は来られず、かえって医者のようにガリラヤの全土を巡回されていたからである(マタイ四23)。それからイエスは、山上の垂訓において、心の貧しい者を祝福し、「自分の敵を愛しなさい」「あすのための心配は無用です」と教えられた(マタイ五34、六34)。これが終末論的な神の国の宣教であるのか。すでに述べたようにシユヴァイツァーは、山上の垂訓を目前に迫った終末を前提にした中間倫理であるとした。しかし、その見方は当を得ていない。なぜなら、イエスは「終末が近いから地上のことは何も考えるな」と言われたのではなく、「神は悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、空の鳥や野のゆりをも心にかけてくださる」と言われているからである(マタイ五45、六26)。これらのことは、終末論とどういう関係にあるのか。

近年の死海文書の発見(一九四七年)以来、^④イエスの終末論に見られる特殊性が大いに注目されるようになった。死海文書は、イエス時代のエッセネ派に属するクムラン教団の実情を明るみに出した。この教団には熱烈な終末論的期待があった。それでクムラン教団をヨハネならびにイエスの出現と結びつけようとする学者もいる。^⑤しかし、死海文書に見られるクムラン教団の終末論を詳細に検討すると、新約聖書のそれとの大きな相違のあることがわかる。この教団の終末論的期待を構成していたものは、周囲の敵との戦闘や野蛮な戦勝の光景である。そこでは民族主義的特徴

と黙示文学的特徴とが見分けがたいほど結合している。ところが福音書に目を転じると、イエスの神の国の宣教の偉大な範例を山上の垂訓(マタイ五―七章)のうちに見出す。そこに見られるのは、愛および神の信頼についての徹底的な要求である。^⑥

「神の国はどのようにして来るのか」ということについて、イエスは特にマタイ一三章とマルコ四章に記されているたとえ話——種を蒔く人、麦の中の毒麦、自然に成長する種の各たとえ——を通して教えておられる。これら一連のたとえにおいて、イエスは弟子たちに、神の国の奥義を知らせようとしておられる。その奥義とは、終末論的な神の国は、最も弱々しく無防備な存在に見える一粒の種として来ている、ということである。この種は鳥に食べられたり、太陽の熱に焼かれたり、いばらにふさがれたりし、^⑦時には毒麦と見分けがたいようなこともある。それが神の国の奥義であるが、その背後にさらに大きな奥義が存在する。神の国をもたらす方は、人間の中で最も依存的に見える種を蒔く人である。「種を蒔く人が種蒔きに出かけた」(マタイ一三3)、「良い種を蒔く者は人の子です」(マタイ一三37)——これこそ神の国の偉大な奥義である。

神の国の奥義は、その背後に偉大な神の力のすべてが隠されている点にある。以上の一連のたとえは、種蒔きのことだけでなく、未来における終末論的収穫を述べることによつて、^⑧そのことを示唆している。その偉大な神の力は、わけでもイエスご自身の人格のうちに秘められている。種を蒔く人としてのへりくだった姿は、イエスのメシヤとしての偉大さをおおい隠している。このイエス・キリストの秘められた偉大さこそ、共観福音書の主題であり、神の国の本質を決定づけているものである。イエスの地上生涯には、現わされている面(啓示)と隠されている面(奥義)との、終末論的な偉大さと人間的な弱さとの、不思議な緊張関係が見られる。前者には山上の垂訓を語り、救いの時のしるしとしての奇蹟を行ない、地上で罪を赦されたイエスの権威が属する。それと同時に、イエスはご自分が人に

知られることを禁じられた。^② そのようにイエスのメシヤ性は、隠されている一つの奥義である。

このようなパラドックスのすべては、「人の子」という称号に集約されている。イエスは種を蒔き、収穫を待ちうけている人である。しかしダニエル七13 14の預言によると、人の子は神から主権と栄光をゆだねられた方である。神の大きなみわざがなされるのは、そのお方においてである。したがって、イエス・キリストの十字架と復活は、神の国の啓示に属する。神の救いのわざが全うされるために、「人の子は必ず多くの苦しみを受け、……殺され、三日の後によみがえらなければならない」(マルコ八31)。最も意味深い神の国の奥義はキリストの十字架である。十字架において、種を蒔く人が自ら種になる。それと同時に、終末論的な事態が進行する。キリストの復活によって、神の国は決定的に可視的な次元のものとなる。今や人の子は、輝かしい未来に向かって立ち、天地を支配する全権を授けられている(マタイ二八18)。

共観福音書における神の国は、奥義であるとともに啓示であり、未来のものであるとともに現在のものである。^③ キリストの復活は、この地上で生起したがゆえに、神の国の現在性にかかわる。終末はキリストにおいて到来した。この世界は神の国のために開かれた。それとともに、キリストの復活は、もはや地上的なものに属さぬがゆえに、神の国の未来性にかかわる。キリストの復活は輝やかしい未来の初穂である(一コリント一五23参照)。救済史の完成である新しい天と新しい地の出現はまだである(黙示録二一参照)。キリストの復活は、一つの新しい観点に道を開くことにより、すでに起こったことと、やがて起こるべきこととの区別を明らかにしている。

4

以上に述べたことから、歴史における神の国を理解する手がかりを与えられる。神の国は、第一義的に歴史の終わりを意味するものではない。神の国を待望することは、終わりの日のことに忙殺されてしまうことではない。なぜなら、神の国は、今や歴史の中に入りこんでいるからである。この点で、種を蒔く人のたとえば決定的な意味を持ちつけている。麦の中の毒麦を抜き集めようとする者への警告(マタイ一三29)は、今日の教会にも妥当する。このことは、神の国の現在性を考慮に入れていない異端的宗派や、あらゆる神学思想や世界観に対して、特に指摘されなければならぬ。キリストの十字架はこの世で生起し、キリストはこの世で復活された。こうして神の国がこの世に入りこんでいるがゆえに、この世は神の救いの力に満ちている。からし種とパン種とのたとえが示しているのは、そのすばらしい効力についてである。

からし種のたとえ(マルコ四30—32、マタイ一三31 32)は、この世における神の国の拡大力を示す。その種は非常に小さいが、とても大きな木に成長し、鳥がその枝に宿り、人々が木陰に憩うようになる。そのように神の国は、この世から遊離することなく、この世との広範な諸関係を求め、人々を地の果てまでも求めていく。それは神の国の外延である。それに対してパン種のたとえ(マタイ一三33)は、この世における神の国の内包を意味する。神の国は全体をふくらませる。パン種のように、人生のあらゆる分野に、社会のすべての領域に浸透していく。それゆえ、未来終末論で不当に強調する熱狂的な終末至上主義の誤りは明白である。それはキリストの復活の力を無視し、高く上げられた栄光の主の支配——みことばと御霊による支配——を正しく理解していない。また、この世こそ種が蒔かれるべき畑であることを忘れている。

しかし、この世に現在する神の国は、その輝かしい未来に取り囲まれている。神の国の現在性が認められるのは、その輝やかしい未来性によって支えられている限りにおいてである。^④ この点で、聖書に基づくキリスト教信仰は、神の国の世俗化ないし人間化に対して、徹底的な戦いを挑まなければならない。そのような考え方は、創造された世界

を自足的なものとみなす点で非聖書的である。その考え方によると、神の国がこの世に現在するのは、単に靈的な意味においてである。人間を含む閉ざされた世界の秩序は、神の支配の及ばぬところと考えられている。キリストの復活は靈的なリアリティを表象する神話論的な理念に過ぎず、新しい天と新しい地を出現させるキリストの栄光の未来は全く考慮されていない。^⑧

共観福音書における神の国は、そのような考え方と全く対照的・対立的である。神は、イエス・キリストにおいて神の国を到来させた創造の主であり、この世界に対して手をこまねいておられる方ではない。神は、キリストを死人の中からよみがえらせてくださった。それゆえに、キリストはこの世界の望みであり、すでに到来した神の国はやがて来たるべき神の国の告知である。したがって、今日の教会は、キリストの二つの時——初臨と再臨——の中間時代に生きている。^⑨キリストの復活は、二つの方向に光を投じている。それはすでに起こったことの証明であり、やがて起こるべきことの保証である。共観福音書において、また新約聖書全体を通じて、すでに起こったことについて、ギリシヤ語動詞の完了時称 (perfect tense) が、やがて起こるべきことについてギリシヤ語動詞の未来時称 (future tense) が使用されているのは、そのためである。

5

教会は神の国の啓示に属している。それゆえ、神の国と教会との関係が正しく把握されなければならない。^⑩ところで、福音書の中で、神の国を意味する「バシレイア」というギリシヤ語はほとんど各ページに出てくるが、教会を意味する「エクレシヤ」というギリシヤ語が出てくるのは二箇所だけである。それはマタイ一六18の「わたしはこの岩の上になわたしの教会を建てます」と、マタイ一八17の「それでもなお、言うことを聞き入れようとしなければなら

ない」。教会に告げなさい。教会の言うことさえも聞こうとしないなら、彼を異邦人が取税人のように扱いなさい」とである。多くの学者は、この二つの言明が福音書の中で全く孤立しているという理由で、それは後代の「教会の神学」の反映とみなされるべきである、と主張してきた。彼らの主張によると、神の国は靈的なもの、教会は社会学的存在であって、教会は神の国となんの内的なつながりも持たないのである。^⑪

しかし、現代の神学においては、再び教会論が前面に押し出されるようになった。^⑫そして今日の新約聖書神学においても、神の国 (バシレイア) と教会 (エクレシヤ) との関係が重視されてきている。この両者の関連性は、これまで述べてきたことに照らして、あまりにも明白である。「エクレシヤ」という語が福音書の表面に出てこない事実、欺かれてはならない。イエスが宣教した神の国において、最初から、そして次第に明らかなる輪郭を描きつつ、神の民が登場してくる。この神の民という思想は、契約の民である旧約のイスラエルから受け継がれている。それゆえ、それが福音書において何の説明もなく、「エクレシヤ」と呼ばれたのである。新約聖書における「エクレシヤ」は、新しい用語でも新しい思想でもない。それは、初代教会において広く用いられていた七十人訳聖書の中で、旧約の神の民であるイスラエルの会衆を指すヘブル語「カール」の訳語として用いられていた。新しいことと言えば、この「エクレシヤ」が今や神の国の光の中に導き入れられていることである。

選民あるいは契約の民としての「エクレシヤ」に与えられていたすべての条件は、神の国において純化され、成就されている。神の国の到来と実現は、「エクレシヤ」の正しい靈的な意味を明らかにした。外延的にも、教会は神の国において新しい分け前と関係を得ている。イエス・キリストの教会は、神の国の世界大規模と力によって統合され、すべての国民から集められる。これは「バシレイア」と「エクレシヤ」とを結ぶ重要な一線である。この両者の結びつきは、さらに別の重要な結びつきによって限定されている。それはメシヤと教会との関係である。な

ぜなら、メシヤは未来の神の民の王として神から遣わされること、旧約聖書に預言されていたからである。

メシヤであるイエスは、十二使徒の選出と訓練において、新しいイスラエルである神の民の出現を告知されている。さらに注目すべきことは、予測もされなかった方法で、メシヤはご自分を「エクレーシア」と結びつけておられる事実である。メシヤは「エクレーシア」の創立者であるばかりでなく、ご自身を「エクレーシア」と同一視されている。福音書は、「人の子」と「主のしもべ」という二重のメシヤ思想を示している。^④ その両者とも、メシヤが彼自身で「エクレーシア」を代表している、という中心思想を表明している。メシヤは、いと高き方の聖徒たちが国を受け継ぐために、永遠の主権を与えられた「人の子」として(ダニエル七14-18)、「エクレーシア」を代表している。また彼は、新しい神の民のために神の審判に渡される「主のしもべ」として(イザヤ五三章)、「エクレーシア」を代表している。このことの意味が最も深く示されているのは受難物語である。メシヤの受難の記事は、最もすぐれた意味において、「エクレーシア」にかかわるメシヤの歴史である。^⑤

以上のことから結論できるように、最初の福音において、「神の国」「メシヤ」「エクレーシア」の三つの概念が有機的一体をなしていた。終末論的・キリスト論的・教会論的観点は、神の国の宣教において決して分離できないものである。「人の子」および「主のしもべ」としての「メシヤ」のいない「神の国」はない。十字架の受難と復活の勝利によってご自身が代表している「教会」を持たない「メシヤ」はいない。それゆえ、イエスは「わたしの教会」について語り(マタイ一六18)、「多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与える」ことができ(マルコ一四5)、御父が彼に「神の国」をゆだねられたように、彼の「教会」に「神の国」をゆだねることができたのである(ルカ二二29)。

6

終わりに、これまで述べてきたことが現代の教会に対して持つ意義を、以下の三点に要約して示したい。

(一) 教会は、神の国の教会として、イエス・キリストの初臨と再臨とにおける神の大きなみわざ(救済史)のリアリティと運命を共にしている。それゆえ、もし救済史が過去あるいは未来において存在することをやめるなら、神の国の教会としての教会も存在することをやめるであろう。教会が真に教会であること(教会の合法性)を証明するために、教会は救済史の基礎の上に確立されなければならない。現代の教会論が直面している最も重要な問題の一つは、教会の合法性である。これには教会の一致という問題もかかわっている。その解答を具体的に示すことは困難であるが、神の国の観点から、教会を救済史の基礎の上に適合させていくことによって、その正しい解答が見出されるであろう。^⑥

(二) 教会は、それが神の国の教会であるという事実から明らかのように、この世とも積極的な関係を持っている。^⑦ 種を蒔く人が種を蒔くために出て行った畑は、この世界である。それゆえ、教会は公同性を求める。その公同性には外延と内包の二つの面がある。前者について言えば、教会は世界大の広がりを持つ。この世の地平線は教会の地平線でもある。教会は宣教活動をたゆまず推進し、世界の各地に移動し、あらゆる未開地に踏み入ることを促されている。後者について言えば、教会はこの世の生活全体とかかわり、そのあらゆる分野で果たすべき使命を与えられている。そのように主張するのは、前世紀の文化的楽天主義からではなく、「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています」(マタイ二八18)と宣言されたキリストの主権の告白に基づいている。

(三) 教会は、神の国の教会として、その輝かしい未来を求めている。教会の現在のためにタラントが与えられてい

る。遠い国へ行かれた教会の主は、やがて帰って来られる。教会が主の帰還を待ち望むことは、与えられたタラントを用いて働くことである。もしそうしたいなら、教会は主から「わたしのタラントで何をしたか」と責任を問われるであろう(マタイ二五14-30参照)。したがって、教会が主のために働くことは、主を待ち望むことでもある。未来のために現在を忘れさせ、地上のこののために天のことを忘れさせようとする誘惑が満ちている中で、教会は、夜中にもしびを用意して花婿を迎えに出て行った、あの賢い娘たちの姿をあかししなければならない(マタイ二五1-13参照)。

注

- ① マルコの福音書では、ひそかに育つ種(四26-29)とからし種(四30-32)の二つのたとえ、ルカの福音書では、からし種(一三18-19)とパン種(一三20-21)の二つのたとえが、それに当たる。後者の二つはマタイでも同様であるが(マタイ一三31-32、33)、マタイの福音書には、そのようなたとえがさらに八つもある。麦の中の毒麦(一三24-30)、隠された宝(一三44)、高価な真珠(一三45-46)、魚網(一三47-48)、赦さぬしもべ(一八23-35)、ぶどう園の労務者(二〇1-16)、十人の娘(二五1-13)の各たとえである。マタイの福音書では「天の御国」と言われているが、「神」の名を用いることを避けたユダヤ的語法であって、「神の国」と全く同義的に考えよう。C・H・ドッド『神の国の響』(日本基督教団出版局、一九六四年)四〇ページ以下参照。
- ② Bright, John, *The Kingdom of God*, Abingdon, 1955, p. 17.
- ③ R・シユナッケンブルク『神の国』(キリスト教研究叢書「ひびす」10、紀伊国屋書店、一九六二年)一ページ以下。Bruce, F. F., *This is That: The New Testament Development of Some Old Testament Themes*, Patanoster, 1968, p. 23.
- ④ これは古くから学問的論争の対象となっていたが、多くの学者が「即位の詩篇」として挙げているのは、四七、九三、九六一-九九の各篇である。
- ⑤ R・シユナッケンブルク『前掲書』二二ページ以下参照。
- ⑥ Ridderbos, H. N., *When the Time, Had Fully Come*, Erdmans, 1957, p. 44ff, (第三章「パウロ的宣教の救済的性格」。なお『新聖書注解』新約第二巻(い)のこのことは社、一九七三年)の中の拙文「パウロの生涯と思想」四七ページ以下参照。
- ⑦ J・W・C・ワンド編の抄訳版からの邦訳『神の国』(出村彰訳、日本基督教団出版局、一九六八年)がある。
- ⑧ カルヴァン『キリスト教綱要』別巻(渡辺信夫編、新教出版社、一九六五年)の事項索引の「王国、王権」の項(三九ページ)を見ると、『基督教綱要』の各篇の諸章にわたって神の支配・統治に言及していることがわかる。しかし、「神の国」あるいは「神の支配」が大きなテーマとして取り上げられたり、それについて全体的に論じられたりはしていない。
- ⑨ 自由主義神学者の一人アドルフ・フォン・ハルナツクの代表作『基督教の本質』(Das Wesen des Christentums, 1900、山谷省吾訳、岩波文庫、一九三九年)は、イエスの説教の特質を論じる中で、第一に「神の国とその到来」を挙げている。
- ⑩ アメリカにおける社会的福音運動は、W・ラウシェンブッシュ(一八六一-一九一八年)の指導で進められた。
- ⑪ 一九〇一年に『メシヤと受難の秘密』(Das Messianisund Leidens geheimnis、波木居齊二訳『イエスの生涯』、岩波文庫、一九五七年)を著わした。なおシュヴァイツァーの著書『イエス伝研究史』(白水社刊「シュヴァイツァー著作集」第十七-十九巻、一九六〇-六一年)が一九一一年に出た。
- ⑫ W・パネンベルクは、「今日、神学は神の国の理解が倫理的な理解から終末論的理解へと移行したところのラディカルな変化を総括しなければならぬ」と述べている(『神学と神の国』八九ページ、近藤勝彦訳、日本基督教団出版局、一九七二年)。
- ⑬ ルドルフ・ブルトマン『新約聖書と神話論』(山岡喜久男訳ならびに詳注、増訂新版、新教出版社、一九五六年)。ブルトマンの手頃な解説書として、熊沢義宣『ブルトマン』(増訂版、日本基督教団出版局、一九六五年)がある。
- ⑭ 福音的立場からブルトマンを批判したものに、ヘルマン・リダボス『ブルトマンの神学』(グラズス・リダボス『現代神学入門』(聖書図書刊行会、一九六六年)の第二部に収録)がある。
- ⑮ 邦訳されている標準的な死海文書についての紹介書は、M・パロウズ『死海写本』(新見宏・加納政弘共訳、山本書店、一九六一年)、H・H・ローリー『死海巻物と聖書』(関谷定夫訳編、ヨルダン社、一九六八年)である。なお死海文書の主要な写本の厳密な邦訳『死海文書——テキストの翻訳と解説』(日本聖書学研究所編、山本書店、一九六三年)がある。
- ⑯ その代表者は、フランスのデュボン・ソメール教授。彼はクムラン教団において終末論的役割を演じている「義の教師」をイエス・キリストの先駆者とみなし、キリストのことを「義の教師の驚くべき再受肉者」と言っている(H・H・ローリー『前

- ⑬ 特に死海文書の中の『戦いの書』(光の子と闇の子との戦い)参照。これは山本書店刊行の『死海文書』の中に収められている。
- ⑭ たとえば、「しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害するもののために祈りなさい」(マタイ五44)。「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて与えられます」(マタイ六33、なおその前後の六25―34参照)。
- ⑮ 種を蒔く人のたとえの解釈が、イエスご自身によって示されている(マルコ四13―20、マタイ一三18―23)。それによると、強調点が終末論的な神の国の奥義から、神のことばの異なる四種の聞かれ方に置かれている。J・エレミヤスは、このたとえの解釈は、原始教会の寓意的解釈の所産と見る(『イエスの譬え』善野碩之助訳、新教出版社、一九六九年、八二ページ以下)。この解釈はたとえの真理に属しているので、イエスがそれを語られたのでないとするのは行き過ぎであろう。しかし、イエスがこのたとえを語られたのは、福音をいかに聞くべきかという勧告のためだけではない。
- ⑯ C・H・ドッドは、彼の表現された終末論(現在終末論)の立場から、神の国はすでに到来していると見て、未来における豊かな収穫の面を不当に軽視する(『神の国の譬』室野玄一・木下順治共訳、日本基督教団出版部、一九六四年)。それは、このたとえを正しく解釈していない。
- ⑰ このことをマルコの福音書における「メシヤの秘密」(一44、五43、七36、八2630、九9ほか)として、最初に問題を提起したのは、W・ヴェレーデである。彼は一九〇一年に『福音書におけるメシヤの秘密』(Das Messiasgeheimnis in den Evangelien)を著わした。
- ⑱ 「未来と現在とが不可分離的にからみ合っているというのが、イエスの神の国告知の特徴なのである。この未来と現在の相互関係を理解することが、現在なされているイエスの研究においてもっとも重大な一つである」(W・パネンベルク『前掲書』九二―九三ページ)。
- ⑲ 現在日本でも街頭や家庭訪問で熱心に活動しているモルモン教(末日聖徒イエス・キリスト教会)、エホバの証者(ものみの塔聖書冊子協会)、統一教会(世界基督教統一神霊協会)は、その代表的な事例である。
- ⑳ この点を特に強調するのは、パネンベルクである。「確かに、イエスは神の国の現在を語った。しかしそれは、常に到来しつつある神の国の現在という仕方であらう。イエスの使信にとって未来性は根本的なものである」(『前掲書』九二―九三ページ)。
- ㉑ 神の国の世俗化の神学は、特に最近のアメリカにおいて顕著である。H・コックスの『世俗都市』(塩月賢太郎訳、新教出版社、一九六七年)がその問題意識をよく反映している。神の国の人間化を進めているのは、ブルトマン流の福音の実存主義的理解である。ここでは神中心的な視点は失われ、人間を真に人間たらしめるのに必要な神の国の超越性が残されているに過ぎない。その超越性は、もちろん実存哲学の意味においてである。そのような実存主義の神は、人間を真に人間たらしめるのに必要な限りで神であるに過ぎない。
- ㉒ O・クルマンの『キリストと時』(前田護郎訳、岩波書店、一九五四年)は、キリストの初臨において決定的な時の中心が到来し、終末論的な神の国が実現したことを主張する。しかし、終末論的な神の国の勝利と完成の日はなお未来に待望されている。それはキリストの再臨の時である。現在の教会は、キリストの初臨による神の国の実現(現在性)と、キリストの再臨による神の国の完成(未来性)との中間に置かれている。
- ㉓ パネンベルクは、「教会の中心的存在、教会理解にとって考慮すべき主要点は、神の国でなければならぬ」とし、「教会論は、教会とともになく神の国とともに始まる」と主張する(『前掲書』一一四、一一三―一三三ページ)。新約聖書の教会論への最適のアプローチは神の国である。
- ㉔ 十九世紀の自由主義神学において、この傾向は一層顕著であった。
- ㉕ この傾向を象徴するものとして、カール・ブルトマンの名著『教会教義学』(Die Kirchliche Dogmatik)の刊行が挙げられる。最初は『キリスト教義学』の表題で出たが(一九二七年)、その後(一九三二年)、前者のように改題された。
- ㉖ イエスは、受難の「主のしもべ」と榮光に輝く「人の子」という異なる二つのメシヤ思想を、ご自身において一つに結び合わせた(ルカ二四26)。それが証明されたのは、十字架と復活の出来事においてである。
- ㉗ メシヤの受難に関連して、これまでしばしば、代償的贖罪の思想は最初の福音にはなかった後代の解釈である、と言われてきた。それが大きな誤りであることは、新約聖書の統一性を持ち出すまでもなく、神の国の福音そのものがこの真理を含んでいることのゆえに明らかである。

③ それにはさらに、教会の使徒性という問題がかかわっている。教会は、救済史についての権威ある使徒たちの証言である聖書の上に建てられていなければならない。使徒たちは、全権をゆだねられたキリストの証人であり、それゆえに教会の創立者である。したがって、教会の合法性も一致も、その使徒性と不可分の関係にある。教会が聖書に基づいて使徒たちと一つである

ところに、真の教会があり、教会の真の一致がある。

④ 教会と世界との不可分離性に言及して、パネンベルクは次に述べている。「教会と世界の関係を軽視するあらゆる教会概念は一面的であるからして、また、ただ教会と神の国の関係だけが教会と世界の関係こそ教会の本質的契機であることを神学的に説明するからして、すべての教会論的主題は神の国の観点からのみ神学的に考察され得ると言うことになるのである」(『前掲書』一二六ページ)。

⑤ この論文の3以下は、特に Ridderbos, H.N., *When The Time Had Fully Come*, Erdmans, 1957 の第一章「共観福音書の証言による神の国」に教えられた点が多い。

(蓮沼キリスト教会牧師、聖契神学校講師)